

資料室便り

交通の専門図書館 交通経済研究所資料室

■新着書棚から（新しく受け入れた資料の紹介）



『由利鉄と銚子電鉄の現場からみる ローカル鉄道の可能性』

那須野育大編著，
春田啓郎，竹本勝紀著
成山堂書店発行
2026年8月／1,980円（税込）
所蔵箇所：信濃町

人口減少やモータリゼーションの進展，相次ぐ自然災害などにより，ローカル鉄道は厳しい経営環境に直面している。本書は，大学研究者による分析と，鉄道経営者による現場での実践活動を通じ，その存続と活性化への道筋を探る。

ローカル鉄道の存在意義は，単なる企業の収支採算性だけで測れるものではない。沿線地域にもたらす外部経済効果や移動の安心感を含め，そのあり方は地域全体で判断すべきものと捉えられる。活性化再生法などの制度や，上下分離方式の枠組みの活用も視野に入るなか，自治体・事業者間でインフラ維持の役割や費用をどう分担し，日々の運行や収益を確保するかが問われている。

本書では，由利高原鉄道，銚子電気鉄道，しなの鉄道の事例を通じ，情報発信やファンづくり，需要創出などの取組みを検証しつつ，自治体や沿線住民が鉄道を「自分たちのもの」と捉え，事業者と連携して支えていくことの重要性を示す。鉄道事業者や自治体の担当者が，地域の足と資源としての鉄道を再評価し，具体的な連携を進めるための可能性を読み解く一冊である。（原）

■書庫のなかから（所蔵資料の紹介）

『北海道の交通体系展望』

柿沼博彦，田村亨著
北海道地域総合振興機構発行
2011年3月
所蔵箇所：上野（一般公開中）

本書は，北海道における技術的な視点からみた鉄道イノベーションと高速交通体系について，2050年の世界を念頭に論じたものである。2010年頃の交通を取り巻く状況や，当時どのような議論が行われていたかを知ることができる。

北海道の鉄道経営の環境については，営業キロ2,500kmのうち約30%で1日の輸送密度が500人未満と低いなか，鉄道と並行している高速道路の建設が進むなど，大変厳しい状況であることを指摘している。また，北海道の活性化への寄与が期待されている北海道新幹線の技術的課題として，①青函トンネル内の貨物列車との共用運行，②青函トンネル環境に対する対策，③雪・寒害対策を挙げている。そして，北海道の高速交通体系については，北海道と北海道開発局の計画の中に経済成長は含まれていないが，地域の経済成長戦略と連動した交通投資を行うべきだと述べている。そのうえで，地域ブロック内のスムーズな人とモノの移動を実現する日帰り圏（3時間圏）の形成や，アジアゲートウェイ国内アクセスとしての新幹線と航空の融合・連携などを提案している。（古森）

資料室からのご案内

蔵書オンライン検索，新着図書・雑誌の情報，月別新着図書目録，所蔵社史・年史のリストなどは，資料室 HP（<https://www.itej.or.jp/about>）をご覧ください。

担当：古森崇史，原祥太，土方規義，田邊由佳

